



## 最近本県で知られてきた植物について

富山県立新川女子高等学校 小路 登一

はじめに

昭和43年頃から高校の生物の先生方とフィールドを歩く機会に恵まれ、非常に多くのことを学び合うことができた。それらの中には新に本県のフロラに加えるべきものや分布が比較的稀と思われるものの新産地も含まれているので、それらのことを中心に報告する。

### 1. シダ植物

#### (1) イノデ類 Polystichum

今までに報告されたものをまとめると、下表に示したように9種2変種4雑種となる。この類はとともによく似ているので、1973年倉田<sup>1)</sup> 悟教授を招いて指導を受けるまでは、余り分かっていなかったといつてよいようである。日本産イノデ類は倉田教授が19種5変種1品種<sup>2) 3) 4)</sup> 21雑種を1964年に、5変種1変種を1969年に追加報告している。

#### ア. ツヤナシイノデとサカゲイノデ

表から推定されるように、始めの頃は両者が混同されていたようである。ツヤのないイノデを見たらサカゲイノデと考えてよい程その分布は広い。しかしツヤナシイノデは極めて稀<sup>1)</sup> であり、八尾町大長谷で確認されるまではその存在に疑問が持たれていたものの1つであった。

#### イ. 雑種

##### (ア) シロウマイノデ (倉田1962)

これは新に目録に追加しなければならないもので、カラクサイノデとイワシロイノデまたはサカゲイノデの雑種と考えられているものである。本県ではイワシロイノデが確認されていないので、恐らく有峰産のものはサカゲイノデとの雑種と思われる。

##### (イ) ドウリョウイノデ (飯田 和新称)

イノデとアイアスカイノデの雑種である。葉は両親より大きく胞子は不定型、胞子嚢はやや辺寄りで葉柄上部の鱗片はイノデより狭い。

##### (ウ) フナコシイノデ (倉田1960)

イノデとサカゲイノデまたはツヤナシイノデの雑種である。本県のものとはツヤナシイノデが稀にしかないことから、サカゲイノデとの雑種と考えられる。葉は雑種強勢によって両親よりぐんと大きくなる。胞子は不定型かできない。葉柄上部の鱗片はイノデよりずっ



本県産イノデ類

○印：それぞれの目録に記載されているもの

植物名	5) 本田 1928	6) 御旅屋 1931?	7) 御旅屋 1934	8) 進野 1934	9) 吉沢 1940	10) 大島 1964	11) 黒崎里見 1968	12) 大田小路 1968	13) 安田 1973	1) 小路 1976	その後
1. ホノイノデ	○										
P. Braunii (Spenn) Fée	○										
2. カラククサイノデ	○										
P. microchlamys (Christ) Matsum.				○							
3. シロウマイノデ											
P. × Shim-Tashiroi Kurata											有峰 1973 (小路)
4. ヒメカナワラビ			○								
P. tsus-simensense (Hook.) J. SM.											
4. オオキヨズミシダ											
var. Mayedarae (Tagawa) Kurata											
5. サイゴクイノデ											
P. pseudo-Makinoi Tagawa											大岩～浅生 1976 (中池)
6. イノデモトキ											
P. Tagawanum Kurata											
7. イノデ											
P. polyblepharum (Roem.) Pr.											
8. アイアスカイノデ											
P. longifrons Kurata											
9. ドウリョウイノデ											
P. × anceps Kurata											
10. サカゲイノデ											
P. retroso-paleaceum (Kodama) Tagawa		○	獅子鼻 五色原 杉尾峠	立山温泉 大岩 水谷、F山	○	○	○	○			
11. ツヤナシイノデ											
P. ovato-paleaceum (Kodama) Kurata											八尾町大長谷 1974 (小路)
12. フナコシイノデ											
P. × Inadae Kurata											
13. ホクリクイノデ											
P. × hokurikuense Kurata											

と広い。

(エ) ホクリクイノデ (倉田新称)

アイアスカイノデとサカゲイノデの雑種で孢子囊の集団は他の3雑種に比較して、最も固くはじけない。葉柄の鱗片はドウリョウイノデが四方八方に出てガサガサした感じに対して寝ている。1963年新潟県能生で倉田教授が採ったものがタイプで、北陸地方に普通であるが愛知・静岡などでも知られている。

(2) その他

ア. 目録に加えられるもの

(ア) ミズスギ

1976年10月小杉町湿地調査の際に確認 (大島・小路)

(イ) ハカタシダ

1975年琴路峡のウラジロガシ林内で植生調査中大田 弘氏が採り倉田氏が同定したもの。

1976年「富山県のシダ植物」を卒論テーマとした柳沢浩一氏が氷見で採り確認。

(ウ) フクロシダ

1976年 柳沢浩一氏が黒部峡谷下の廊下の岩壁のものを確認。

(エ) ミヤマシダ

1973年 黒部湖平の小屋 (小路) で確認。

(オ) ニシキシダ

1976年 中池敏之氏が上市町大岩で確認。

(カ) シシオクマワラビ

1976年 中池敏之氏が朝日町泊付近で確認。

イ. 新産地

(ア) コシダ

御旅屋<sup>7)</sup>氏は呉羽山, 西砺波郡山地 (西島稔), 進野<sup>8)</sup>氏は前沢村 (結城・吉沢・御旅屋) 呉羽山 (御旅屋) を挙げていたがそれらが現在も生育しているのかどうかは確認されていなかった。1976年大島哲夫氏が小杉町上野で, 1977年7月黒部市枕野で小路・山本陽一氏が細々と生育しているのを確認した。

(イ) ヒロハノイヌワラビ

1976年10月中池敏之氏が小川温泉元温付近で確認された。私は1976年能登七尾市で日本シダの会北陸支部会で倉田教授から指導を受けるまで, 和名のヒロハの意味に惑わされていた。よく注意すると県下には意外に多いと思われる。タニイヌワラビ類似の葉の厚いイ



ヌワラビに注意してみるとよい。

(ウ) カラクサシダ

1976年 中池敏之氏が小川温泉元湯付近で、佐橋紀男氏が朝日町大平で採取確認された。従来は上市町大岩、東砺波郡大鋸屋村、立山連峰である。

(エ) タチヒメワラビ

1973年 越中小坂谷(小路)で採取していたものを倉田教授が同定確認された。

ウ. その他

(ア) サキモリイヌワラビ

1973年鈴木 俊夫氏が新潟県滝谷川で採取倉田教授が同定し北限地となった。このシダは能登の七尾市にも見られる。隣接する県にありながら本県では報告されていない。今後とも確認したいシダの1つである。

(イ) オオヒロハノイヌワラビ

目録中のオオヒロハノイヌワラビは標準和名として使われなくなった。したがって従来オオヒロハノイヌワラビと呼ばれていたものは、カラクサイヌワラビ・ヒロハノイヌワラビ・オオカラクサイヌワラビの何れかに該当するものであることを国立科学博物館中池敏之氏から、ご教示いただいたのでお知らせする。これも確認が望まれるものの1つである。

2. 帰化植物

帰化植物については、泉 治夫氏がハキダメギク・ワルナスビ(千保川沿い)・シロバナシナガワハギ(高岡市中川)・オランダハッカ(高岡市二塚)・ビロードモウズイカなどを、大田 弘氏はブタナ・ヒレアザミ・ハタザオガラシ・ビロードモウズイカ・コメツブツメクサ・サボンソウなどを報告している。高校生物教育研究会のフィールド研究会でも数年前から調査し一部を報告する予定でいる。比較的最近と思われるものの確認産地と年月は次の通りである。

- (1) キンガヤツリ 魚津市川縁 畦 1976年10月, 1977年10月
- (2) アメリカネナシカズラ 大島村国道8号線沿い 1977年7月, 1977年10月
- (3) イガヤグルマギク 富山新港 1974年7月
- (4) ホザキマンテマ 富山新港 1974年7月
- (5) ヤナギハナガサ 滑川市高月町 1976年
- (6) ヒメマツバボタン 入善町上野 1977年7月(5・6年前から確認されている?)
- (7) フサジュンサイ 高岡市古城公園 1975年8月
- (8) オオカナダモ 山田川, 井田川合流点 1973年8月
- (9) コカナダモ 神通川 1973年7月 小矢部川水系では非常に多い。

3. その他

(1) エッチュウミセバヤ

1973年5月富田幹夫氏が神通川の一支流の岩壁から新種として発表したものである。<sup>19)</sup>

(2) コップモエギスゲの新産地

従来はスゲ属図譜の著者吉川純幹氏が呉羽山で見たものが唯一の産地であった。<sup>15)</sup>1977年6月黒部市枕野のアカマツ・コナラ林縁で確認することができ県下の産地は2ヶ所となった。しかし呉羽山では、未だお目にかかれていない。

おわりに

以上のようにシダ類と帰化植物を中心とする報告となったが、本県のシダはイヌワラビ類と深山から亜高山系のものを精査すべきように思う。日頃から格別のご指導を戴いている倉田 悟・中池敏之・大田 弘・田中 晋・鳴橋直弘の各先生、ご教示激励を戴いた進野久五郎・本多啓七先生、陸水生物研究会、フィールド研究会の諸氏に感謝いたします。

参考文献

- 1) 小路登一 1976 富山県のシダ植物 富山県高教研生物部会フィールド研究会会報2号
- 2) 倉田 悟 1964 日本のイノデ類 横須賀市博物館研究報告 No. 10
- 3) 倉田 悟 1969 日本のイノデ類補遺 (I) 横須賀市博物館研究報告 No. 15
- 4) 倉田 悟 1973 日本産シダ植物分布資料 I・II 日本シダの会会報 No. 15~17
- 5) 本田正次 1928 白馬岳連峰天然記念物指定地域内所産植物目録 白馬連山高山植物帯植物調査報告
- 6) 御旅屋太作 1931 中部山岳国立公園立山連峰植物目録
- 7) 御旅屋太作 1934 富山県産シダ植物目録
- 8) 進野久五郎 1934 富山県産羊歯植物目録(予報)
- 9) 吉沢庄作 1940 立山連峰植物目録 立山連峰植物調査報告
- 10) 大島哲夫 1964 大岩付近のシダ植物について 高教研生物部会研究会誌第5号
- 11) 黒崎史平・里見信生 1968 富山県大岩川流域の植物地理学的研究 金沢大理学部植物園年報第1号
- 12) 大田弘・小路登一 1968 最新府県別日本シダ植物略目録(33) 富山県 日本シダの会会報 No. 97
- 13) 安田良栄 1973 富山県白岩川流域シダ略目録 日本シダの会北陸支部会富山会場資料
- 14) 泉 治夫 1976 二上山周辺の帰化植物 富山県立二上工業高校生物部研究紀要
- 15) 大田弘・小路登一 1964 富山県産スゲ属植物目録 富山教育 528号



- 16) 長田武正 1972 日本帰化植物図鑑 北陸館  
 17) 長田武正 1976 原色日本帰化植物図鑑 保育社  
 18) 杉本順一 1965~1973 日本草本植物総検索誌 単子葉・双子葉・シダ篇六月社・井上書店  
 19) 富田幹夫 1973 富山に自生する新種エッチュウミセバヤ 植物研究雑誌 Vol. 48 No 55  
 20) 中池敏之 1970 シダ雑種の索引  
 21) 宮脇 昭編 1977 富山県の植生 富山県

### 帰化植物漫談

本多省三、啓七

わが国に渡来した帰化植物を年代別に整理すると①史前帰化植物 ②旧帰化植物 ③中世以降の比較的新しい帰化植物 ④導入経路のはっきりした新しい帰化植物の4群になる。

生育個所から眺めると、一般に早く帰化した史前、旧帰化の植物ほど、広い範囲にわたって分布し、しかも人為の影響が規則的である水田や畑などに生えている。これに対し、都市の空地や路傍、それに宅地、工場用造成地、または鉄道沿線などのように、たえず自然が破壊され、不安定な個所では新帰化植物が繁茂している。

新帰化植物は、その帰化過程によって、次の4群に整理することができる。

- (1)自然帰化植物：まったく気づかないうちに、外国から入りこんだものに付着、あるいは混入してきたもので、大方はその渡来時期が不明である。ブタクサ、アメリカセンダングサ
- (2)逸出帰化植物：下記のような目的や用途によって、人為的に輸入の上、栽培された有用植物が野生状態となったもので、これらの帰化植物は渡来時期が比較的明瞭である場合が多い。①牧草、緑肥として—シロツメクサ ②食用として—オランダガラシ ③薬用として—オランダハッカ ④観賞用として—ヒメオドリコソウ（昭和48.4.29、神通川大橋下の右岸堤防上に群落—啓七） ⑤緑化工用として—グリピング・レッド・フェスク。
- (3)仮住帰化植物：半年から長くとも2年ぐらゐの短期間で自然消滅する—時的な帰化植物—カミツレモドキ (4)予備帰化植物：局部的に帰化植物となっているが、広く分布するにいたらない植物—ブタクサモドキ。

わが国に生育している北米産帰化植物は約20%、93種位あげられ、そのうち、プレーリー草原植物のきく科が35種もあげられる。原地でコムギやトウモロコシ畑に侵入して一面に大型の黄花でいろどるヒマワリの逞しさに一驚した北米の旅が思いだされる。

## ヌマガヤ湿原の生態

県立雄峰高等学校 本多省三  
 私立富山第一高等学校 本多啓七

はじめに

ヌマガヤ湿原は日本の代表的な自然湿原である。しかも生育の許容度が大きいために水平的、垂直的に広く分布している、1属1種の固有種である。ヨーロッパにはこれに似た *Molinia* がある。生態的には次のようなヨシとショウジマウスゲとの中間の特性を備えている。

○ヌマガヤの特性

- ①水分の多少には余り左右されない。地下水位は20~30cmが最適である。
- ②PHは3~7まで広く分布する。PH5.5~6.0が最適である。
- ③間接光、直接光の選択なく、幅広い範囲で生育する。
- ④種子は降霜の少ない年にもみ結実する。
- ⑤無性繁殖は節間からの萌芽によって行なわれ、ほふく根茎が無く、地下部は野地坊主式の株状構造をなす。

以上のような特性によって、泥炭地といった特有の環境下にあつて優占的な生育を遂げてヌマガヤ湿原を形成しているが、その相観や泥炭の中から、空間的には生態型や示相植物を、時間的には変化系列や泥炭形成の年代などについて記述して、読者各位のご叱正とご指導を賜ることを希望するものである。

### 1. ヌマガヤ湿原の特性考察

#### 1) ヌマガヤ湿原の遷移系列の位置

遷移系列は次の如く考えられるが、これらの系列の中で、ヌマガヤ湿原は中間的位置を占めている。

#### A 低地性遷移系列型

##### ①乾性遷移系列（ヌマガヤ群落の段階なし）

荒蕪地→シバ草原→チガヤ草原→ススキ草原→ササ草原→森林

##### ②湿性遷移系列

池沼地→ヨシ湿原→ヌマガヤ湿原→ススキ草原→ササ草原→森林

→ミズゴケ湿原

#### B 高地性遷移系列型